# 文章内の対立的命題

## ——その顕在化モデルの提示——

大　橋　　哲

目　次

1. 言語単位の二次元的考察
2. 比較関係の意味
3. 系列的関係の実現過程
4. 世界の書き換え
5. Comparative Denial 再考
6. Comparative Denial 再定義
7. 節関係のネットワーク
8. テキスト分析
9. 結論

## 1. 言語単位の二次元的考察

あらゆる言語単位はその文脈において，統合的関係（SYNTAGMATIC RELATION）と系列的関係（PARADIGMATIC RELATION）という二つの異なる関係で捉える事ができる。統合的関係とは，ある言語単位と，共に同じ文脈を構成している他の言語単位との間の線形的連立関係である。系列的関係とは，同一の統合的関係は保ちながら，互いの類似又は対照に基づき入れ替えることが可能な言語単位の間にみられる並列関係である。例えば，

The convict was male. という文を四つの単語の線形的連続とみなした場合，それぞれの語の値は同一文内の他の語との統合的関係によって決定される。この文中の male という単語は，他の 3 語との関係によってその値を得るのであり，The male convict was sent to another prison. という文中の male という単語とは異なる値を持つ事になる。一方，これら二つの文においてはいずれの場合にも，male という単語はそれと対照的な意味の female という単語と入れ替えても，文中の各単語間の統合的関係は維持される。この時，male と female は系列的関係にあるといえる。

従って，系列的関係にある言語単位にはその中から一つだけ選ばれる選択肢のような面があり，文の構成要素として選択されたもの以外は潜在的なものである。しかし時に，本来系列的関係にあった二つの言語単位が，何らかの目的で統合的関係として同一文内に顕在化したとみなし得るような場合がある。例えば，The convict was not male but female. という文における male と female の間には，系列的関係の統合的関係としての顕在化を想定する事が可能と思われる。この文を単に情報内容の伝達という機能についてのみ論じれば，male と female は反対の関係に有り，not male は即ち female なのであるから，余剰的情報という事になってしまう。しかしこの文は，The convict was male. という前提を否定し訂正するという目的を果たしている事を思えば，その目的ゆえに not X but Y という構造が用いられ，元来系列的関係にあった反対の意味の単語がその枠の中で顕在化したものと考える事ができる。

注意すべき点は，系列的関係が統合的関係として顕在化するという時，その系列的関係をそもそも系列たらしめていた統合的関係は，新たな統合的関係に置き換えられ，その中ではもはや，元来の系列的関係は成り立たないという事である。例えば，The convict was male. の male と female は系列的関係にあるといっても，The convict was not male but female. というように両方の単語が顕在化した時点で，その系列的関係は消滅している訳である。

また，系列的関係は統合的関係に先立ち独立して存在してはいないという事も注意を要する。male と female の場合は，特定の文脈とは関係なく反対関係の単語として存在しており，その意味的繋がりゆえに系列的関係を持つ場合も多いと考えられるが，A he-goat is a male goat. という文中では二つの単語の間に系列的関係は無い。文中の各単語の値は他の単語との統合的関係により規定されるのであり，その規定無くして系列的関係を論じる事は無意味である。

更に注意を要する点は，元来系列的関係にあったと理解される言語単位が，必ずしも現在の文脈と独立した深い意味的な関係を持っているとは限らないという事である。not X but Y という構造には，not male＝female と表すことができるような明らかな対照関係を持たない言語単位でも，これに当てはめることにより元来は系列的関係をもっていたものと理解されるようになるという機能が有る。例えば，to talk nonsense と to act は，male と female のような関係は持たないが，We are here not to talk nonsense, but to act. という文においては系列的関係の対立的概念として捉えられる。つまり，これら二つの言語単位がこの構造により統合的関係として現れて始めて，元来は系列的関係であったと理解される。従って，文生成に対して文理解という立場で考えるなら，この様な構造は，実際に統合的関係として顕現している二つの言語単位を，元来は系列的関係にあったと理解させるための言語手段であると言った方が良いかもしれない。いわば，横に並べて書いた二文字のうちの２番目を移動して，１番目の文字と縦に並べ替えよと指令をだすような役割を果たすのである。

言語単位の統合的関係といういわば横の関係と，系列的関係といういわば縦の関係は，文内の単語や句についてだけではなく，節や文といった言語単位の間にも関与し得る。文境界を越えて，元来何らかの系列的関係にあったと思われる二つの節が，今は統合的関係として顕在化していると考えられる場合があるのである。例えば，It was officially reported that the convict

escaped from the prison. In fact, he didn't. On the contrary, he killed himself in a cell. という文章における，the convict escaped from the prison と he killed himself in a cell という二つの節は，その様な関係にあると感じられる。二つの節をそれぞれ p と q と表すと，この文章全体は It was officially reported that p. In fact, not p. On the contrary, q. というように表すことができる。二つの系列的関係の節 p と q は，male と female のように論理的或いは慣習的に反対関係にある訳ではないが，この連立的構造の中で述べられる事により対照的に理解されるようになる。この様な連立的構造は，not X but Y という構造と同様に，系列的関係にある言語単位を統合的関係として顕在化するための手段とみなす事ができる。事実，上掲の文章は，The convict did not escape from the prison as was officially reported, but on the contrary killed himself in a cell. という様に，文脈的効果を無視することにはなるが，not X but Y という構造を用いてもほぼ同様の内容を表現することが可能である。

本稿では，文脈の中で元来系列的関係にあったとみなし得る言語単位，特に反対関係にあると理解される節（より正確には，命題）が，いかなる目的のために，どのような言語手段によって新たな統合的関係として文章に顕在化しているのかを考察する。

## 2. 比較関係の意味

節境界又は文境界を越えて，各言語単位の統合的関係を規定する要因にはさまざまなものが考えられる。[1] 文境界内での各言語単位の形態的な機能による結合関係のように厳密なものではないにせよ，節間の関係を規定する上で非常に重要な役割を果たしている一つの要因として，接続詞や接続副詞によって明示され得るような，意味的・論理的関係がある。この分野における先行研究の中で，節間に成立する意味的・論理的関係の二次元的考察という点

では，特に Eugene Winter (1977) による Clause Relational Approach と呼ばれる文章構造に関する理論の中で論じられている Clause Relation という概念が参考になる。

Winter は，二節間の意味的・論理的関係を Clause Relation と呼び，それを大きく Logical Sequence Relation と Matching Relation という二つの種類に分類している[2)]。前者は，二節間に演繹的な論理関係が想定される関係であり，cause-effect, condition-consequence, premise-conclusion などの繋がりに代表される。それぞれの構成要素の間には時間的な流れがあり，例えば cause と認定された節の意味内容は，その文章内で実際に現れる順番の如何に関わらず，effect と認定された節より時間的に先立つと認識される。

一方，後者の本質的特徴は比較という概念であり，二節間の時間的な繋がりを前提としない。この種類は，比較の結果が同じか異なるかにより更に二つの下位範疇に分けられる。その一つは，Comparative Affirmation と呼ばれるものであり，二つの比較の対象がある点について同一或いは類似していることを表す関係である。この関係は，比較の対象をそれぞれ X と Y とした場合，公式的に「X について真であることは，Y についても真である (What is true of X is true of Y)」と言い表す事のできるものである。例えば，The princes were afraid of the enemy. Their followers were too. という二つの文は，この関係をもつ。もう一つは，Comparative Denial と呼ばれるものであり，二つの比較の対象がある点について異なることを表す関係である。この関係は「X について真であることが Y については真ではない (What is true of X is not true of Y)」と言い表す事ができる。例えば，The princes were afraid of the enemy. In contrast, their followers weren't. という二つの文の間にはこの関係が成り立つ[3)]。

Winter のいう Matching Relation の本質的特徴は，節の中で述べられている二つの対象を比較するという点にあり，二つの節に述べられている内容を時間の流れに沿って連立的に結びつけることをその本質とする Logical

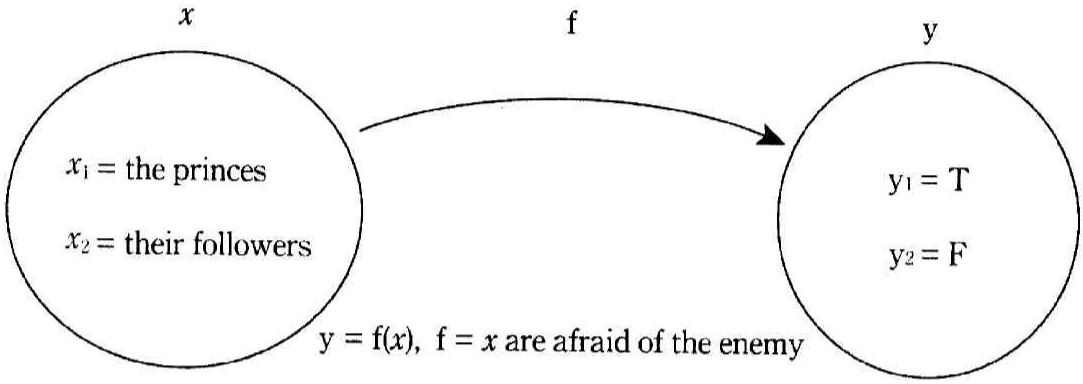
Sequence Relation とは，大きく性格が異なっている。言語は統合的関係として時間の流れの中で実現されざるを得ない事を思うと，比較という概念は，その流れに逆らうものであるかのようである。二つの節は統合的関係といういわば横の関係に並べられて実現するのであるが，その中で述べられている比較の対象は，縦の関係に並び替えられるのである。この二つの比較対象の間に成立する関係は，まさに系列的関係に他ならない。自明のことのようではあるが，系列的関係を意識するのは，比較するためなのである。従って Matching Relation を持つ節は，今問題にしている系列的関係の統合的関係としての顕在化の具体例と考えて良い。

しかし，この「比較のための縦関係」という比喩的な概念は，これだけではまだ実体がつかみ難い。比較というからには，その対象がどのようなものであり，対象のどの点が比べられるのかが明確でなければなるまい。この点について Winter (1977, 6) は，Matching Relation で比較される対照は，物 (things)，行動 (actions)，人 (people) などであると説明している。例えば，前述の The princes were afraid of the enemy. In contrast, their followers weren't. という二つの文は，二つの集団を敵に対する反応という点で比較しているのだといえるかもしれない。又，二文の間に Comparative Denial の関係が成立することを，「princes について真である事が，their followers については真ではない」と公式的に示す事もできる。

ただ，この単純な比較関係の定義については，よくその意味を考えておく必要があると思われる。究極的には，Winter のいう Matching Relation は，二つの系列的関係の言語単位を独立変数とし，その言語単位が当てはめられて実現した時にできる文の真理値を従属変数とする関数に還元できると考えられる。それを $y=f(x)$ と表した場合，変数 y に相当するのは真理値(T/F)であり，変数 $x$ は系列的関係にある言語単位，f は，その言語単位の統合的関係を規定する文脈である。そして，変数としての二つの言語単位 $x_1$，$x_2$ が両方とも T，或いは両方とも F の値を得る場合は，Comparative Affirmation が成

立し，一方がT，もう一方がFの値を得る場合は，Comparative Denialが成立していると考えられる。

たとえば前掲の例でいえば，the princesとtheir followersがそれぞれ独立変数$x_1$，$x_2$，従属変数$y_1$＝T，$y_2$＝F，f＝$x$ are afraid of their enemyと表す事ができよう。次の図はそれを示したものである。




この考え方によれば，比較の対象となるのは人や物というより，系列的関係を持つ言語単位で表現されるあらゆるものである。それは単語という言語単位で表される概念のこともあれば，命題という単位で表されることもある。そして比較の対象となる二つの系列的関係の言語単位は，それぞれが選択された場合に完成する文の真偽について比較されるのである。「比較のための縦関係」という概念は，このような関数処理的な認識作用として，その実体を得るのである。

## 3．系列的関係の実現過程

系列的関係の本質は，その関係を持つそれぞれの言語単位が当てはめられて完成する文の真偽の比較にあると考えた。その比較がMatching Relationを持つ節として実現する過程は，次のようであると仮定される。例えば，the princesとtheir followersは，系列的関係にあることを以下のように図示する事ができよう。

The princes
|　　were afraid of the enemy.　　T/F
Their followers

この図の意図する比較とは，the princes と their followers という主部を構成する名詞句を比較の対象として，それぞれにつき were afraid of the enemy という述部を断定できるか否かという点について比較するという事である。つまり，主部の位置にそれぞれを当てはめた時に成立する文全体の真偽を比較するのである。この比較によりいずれの対象においても述部の断定が可能であると判断される場合は，Winter のいう Comparative Affirmation に相当する比較がなされたと考えられ，例えば The princes were afraid of the enemy. Their followers were too. という形で実現し得る。

それとは逆に，比較の結果二つの対象は述部の断定の可能性において異なる，つまり the princes は成立する文を真とするが，their followers は偽とするという判断が仮になされた場合は，Comparative Denial に相当すると考えられる。この比較の過程は，例えば The princes were afraid of the enemy. Their followers weren't (afraid of them). という二つの文として顕現し得る。又更にこの2番目の文中の否定辞は，not afraid という様にその作用域が限定された場合，それと類似の意味を持つと考えられる fearless という単語に置き換えられて，3番目の文として They were fearless of them. という文で実現され得る。この置き換えは，afraid と not afraid の間に成立する矛盾対当（contradictory）の関係を，afraid と fearless の間に成立する反対対当（contrary）の関係へとより特定することで，the princes と their followers の対照関係を強調する目的によると考えられる。[4] 同時にこの最後の文は，afraid と fearless が今や下図に示すような系列的関係にあり，もう一組の Comparative Denial が成立していることを暗示することになる。

afraid　　F
They were　|　　of　them.
fearless　　T

つまり，afraid の方はそれが当てはめられ完成する文を偽とするのに対し，fearless の方は真とするのである。

本稿で，特に注目したいのは，節（或いは命題）が系列的な関係で結ばれる場合であると述べたが，それも本質的には似たタイプの過程として説明できる。例えば，前掲 It was officially reported that the convict escaped from the prison. If fact, he didn't. On the contrary, he killed himself in a cell. という文の繋がりは以下のようである。まず系列的関係として比較されるのは下図に示すように，一つの命題に関して，それが主張される二つの「世界」である。

| | | |
|---|---|---|
| It was officially reported that | | T |
| \| | the convict escaped from the prison. | |
| In fact | | F |

ここでの比較は，世界$_1$ ($W_1$ : official report) と世界$_2$ ($W_2$ : fact) を，the convict escaped from the prison という命題（p）がその中で真であるか否かという点について比べるものである。そして，命題 p が $W_1$ では T，$W_2$ では F と判断された場合は，Comparative Denial が成立することになり，最初の二つの文が実現する。2 番目の文では，否定された命題 not p が命題 p に対して矛盾対当の関係を持つが，情報量が少なく更に特定化 (specification) を要求する。その要求は 3 番目の文（q）により，反対対当（contrary）の関係として満たされる。この段階では，反対対当の関係にある二命題が下図に示すような系列的関係に有り，それぞれの命題は $W_2$ においての真偽について異なるということが比較される。

| | | |
|---|---|---|
| | the convict escaped from the prison (p) | F |
| In fact ($W_2$) | \| | |
| | he killed himself in a cell (q) | T |

## 4. 世界の書き換え

節単位の系列関係について考察する場合重要な点は，「世界の書き換え」という概念である。前掲の例において，p と q という命題が反対対当の関係で結ばれるに当たっては，その間に not p と表せる命題が介在していることが必要条件である。しかし，同一の世界で p と not p という矛盾対当の関係にある二つの命題を主張することは不可能であり，それぞれに別の世界が必要である。p と not p を同一の文章に想定する場合は，それが言語化されているか否かは別として，必ずそれぞれの命題が主張されるべき二つの世界も同様に想定しなければならない。

この二つの世界は前掲の例の場合，最初の文の It is officially reported という主節と 2 番目の文の In fact という句で明示されている訳である。つまり，2 番目の文では，official report という世界から，fact という世界への書き換えが起こっている事になる。そして，3 番目の文には世界の書き換えを明示するような表現はなく，この文の命題は 2 番目の文と同様現実の中での主張であるとみなす事ができる。たとえ，反対対当の命題を主張する二つの文の間に，世界を書き換えて not p を主張するような仲介的な文がこの場合の様には言語化されていなくても，反対対当の命題が主張されていると考える限り何らかの方法での世界の書き換えが想定できる。

この様な考え方は，節或いは文を次に示すような構造で捉えることを前提としている。

(a) In the world $W_1$, it is true that p.

この構造は，「世界 $W_1$ で，命題 p は真である」という意味であり，世界規定要素（In the world $W_1$），主張要素（it is true），命題要素（p）の三つの要素から成っている。命題の真偽値はそれが主張される世界が確定して始めて決定するものであり，その意味で世界に相対的である。[5] ある世界 $W_1$ では真で

ある命題pが，別の世界$W_2$では否定される事もある。それは，

(b) In the world $W_2$, it isn't true that p.

と表す事ができる。(b)では，否定辞notが主張要素に含まれているが，主張要素は世界規定要素と命題要素を連結する役割を果たす要素である。それ故に，まれではあるが(b)は，論理的にいうと，世界$W_2$と命題pの間の関係を否定して，「$W_2$の中では命題pなど主張しない，つまり命題pは真でも偽でもない」という意味に成り得る。例えば，ある服役囚についてのDid the convict escape from the prison？ という質問に対して，The official didn't mention anything about it at all. と答えるような場合は，「囚人が逃げた」という命題は「役人の言及」という世界では真でも偽でもないということになる。しかし，(b)は普通の場合は(b)′として理解される。

(b)′ In the world $W_2$, it is true that not p.

これは，「$W_2$では命題not pが真である」という意味であり，In fact, he didn't (escape from the prison). という文は(b)′に相当する。この文は，真偽の定まらない(b)に比べれば，情報価値が高い。しかし，否定辞の作用域をどう規定するかによって，(b)′に相当する文はまだ意味が曖昧である。例えば，前掲の例に示した文章の展開とは異なり，In fact, he didn't. He escaped from a police car. というような展開も可能である。従って，普通の場合(b)にせよ(b)′にせよ，情報価の点で不十分であり，意味の特定(specification)が必要となるのである。そこで，特定のための文(c)が続く事になる。

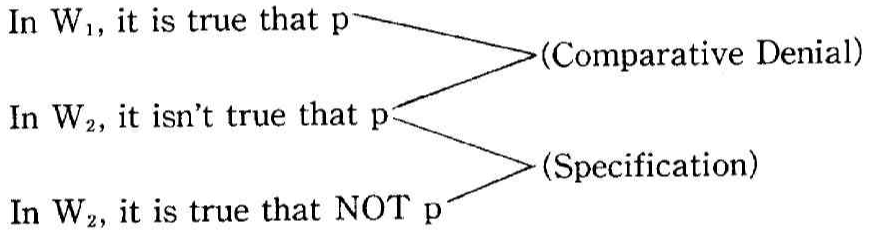
(c) In the world $W_2$, it is true that q (or NOT p).

一般的に，特定化を実行する文(c)は(b)と同一の世界($W_2$)で主張されているとみなし得る。尚，命題qとは，命題not pの特定された意味であるから，命題pとはやはり否定の関係を持つ訳であり，そのことをうまく表すために命題NOT pと表示することにする。注意すべき点は，NOT pをon the contraryなどの語句を用いることにより命題pに対する反対対当の関係として提示する特定の仕方は，特定の一形式に過ぎないという事である。例え

ば，上述のように In fact, he didn't. He escaped from a police car. と文が展開した場合の最後の文は，やはり NOT p と示すべき not p の特定された命題である事に変わりはないが，命題 p とは反対対当の関係にあるとはみなされず，詰まる所 the prison と a police car の入れ替えである。

## 5. Comparative Denial 再考

Comparative Denial の関係をもつ二文のうち 2 番目の文は，前述のように次に続く文によって特定されることが強く予測されるので，結局三つの文は一連の強い意味的な繋がりを持つ文章構造とみなしても良さそうである。この関係は，以下のように図示できる。




ここでいう特定(Specification)の関係を，Winter は繰り返し(Repetition)と入れ換え（Replacement）という興味深い概念で説明している。例えば，前掲の It was officially reported that the convict escaped from the prison. In fact, he didn't. He escaped from a police car. という文章の最後の二文間に見られる特定では，否定辞を除き，省略されていると考えられる情報を全て明示した場合，In fact, he escaped from (　　). というように表す事のできる繰り返しの部分がある。特別な強調のために全く同一の文が繰り返される場合は例外として，文には必ず新しい情報が必要であり，それは入れ換えという手段で行われる。この場合は，先行する文で省略されている the prison が後の文の a police car という新情報に入れ替えられている。

Winter は，この種の入れ替えを特に Corrective Replacement と呼び，それを Matching Relation の一形式であると述べている (1977, 29)。その定義

は，「最初の節がある陳述 (statement) の否定 (denial) を提示し，次の節がその訂正 (correction) を提示する」というものである。前述のように Matching Relation は，Comparative Affirmation と Comparative Denial に二分されるものであるが，Winter が Corrective Replacement をこれらとの関係でどう位置づけるのかは述べられていない。

繰り返しと入れ替えの概念が本稿にとって特に興味深いのは，実際の文章から元来系列的関係を持っていたと考えられる言語単位を見つけ出す事は，まさにこの繰り返しと入れ替えによって可能になるのだという事を示してくれるからである。上記二文の繰り返しの部分である In fact, he escaped from (　). という構造は，系列的関係の認識を関数処理的な活動として説明する際に用いたものに他ならない。比較を $y=f(x)$ と関数的に説明した場合の f とは，節間の情報の繰り返しによって決められるのである。

上掲の例の場合，独立変数は the prison と a police car であり，前者は当てはめて完成する文を偽，後者は真とする。つまり，この比較はここまで考えてきた基準では Comparative Denial であるという事になる。それではなぜ Winter は，この関係をそれと呼ばずに，「Matching Relation の一種である Corrective Replacement」という，ややその位置づけが曖昧になる定義をしているのかという疑問が生じる。更に，この繰り返しと入れ替えの概念は，実は同じ文章の最初の二文間にもそのまま当てはまることであり，それらの間にも，(　) the convict escaped from the prison. という繰り返し部分を取り出す事が可能である。こちらの方は Winter も Comparative Denial と呼ぶものである。

ここで，二組の比較関係を区別する理由とすれば，文章最初の二文間では，最初の文を後の文が否定 (deny) しているといえるのに対して，文章最後の二文間については否定の関係とはとれないという事が考えられる。しかし，もしこの二組の比較関係を区別して，最初の二文間の関係のみを Comparative Denial とするのであれば，Comparative Denial を比較の一翼と位置づ

ける定義を再検討しなければならなくなる。又最後の二文間の関係とされているCorrective Replacementは，「最初の節がある陳述(statement)の否定(denial)を提示し，次の節がその訂正(correction)を提示する」というものであるが，そもそもこの定義は最後の二文間の関係を規定しているというより，最初の陳述の節，否定の節，訂正の節という三つの節の関係を捉えたものと考えられる。従って，今までの考え方に沿えばComparative Denialと判断されるべき最後の二文間の関係を，その代わりに説明する概念とは考え難い。

前述のように，Winterは比較の関係を時間の流れを想定しない二節間の関係とし，Matching Relationと名づけ，それをComparative AffirmationとComparative Denialという二つのタイプに分けたのであった。本稿では，それらの概念を比較という認識作用一般に関するものであると理解し，比較を関数処理的な作業と定義した。しかし，WinterのいうComparative Affirmation/Denialとは，そのように比較一般を包括的に捉えたものだったのであろうか。Winterのこれらの概念は，その一般性を持った定義にも関わらず，実はかなり特殊な比較関係だけをさすのではなかろうか。

この疑問は，Winterが二つのタイプの比較をそれぞれ肯定(affirmation)・否定(denial)という名前で表現した時，既に生じ得るものなのである。Winterは比較関係の節について，二節間の時間的順序付けを前提としないと述べているが，肯定・否定という概念は，既に存在している第一の命題に対する第二の命題の関係であり，第二の命題に対する第一の命題の関係とは言えない。その中で表現される二つの比較対象にも同様の時間的序列がついてしまう。真に，時間的な流れを対象の間に前提としない比較をそのまま表現する二つの命題は，双方向的な関係にあり，一方の他方に対する肯定や否定というようには捉えられないものであろう。又，否定(denial)とは，本来命題pとnot pの関係であり，それは上述のように「世界の書き換え」を前提とするものであるが，「世界」という概念は比較対象となり得るものの一

つでしかない。

Winter の Comparative Denial を上記のようにかなり特殊な比較と考えると，関数処理的に説明される，より一般的な比較との関係は次のように説明できる。前掲の例の第一文と第二文の間，第二文と第三文の間には同種の関数処理的に説明できる比較関係が認められる。それは，「二つの比較対象の一つはそれが完成する命題を真とし，もう一方は偽とする。よって二つの対象は異なる」というように，二つの対象の間に時間的な序列をつけない，対象の制限も無い一般的な比較なのである。しかし，その比較関係が統合的な関係として文章に顕在化する一形式として，一方では第一文が第二文により否定される関係（Comparative Denial）として顕在化し，もう一方では第二文が第三文によって特定（Specification）される関係として顕在化したと考えるのである。それと同時に純然たる比較，つまり一方がもう一方を否定したり，特定したりするといった順序関係を持たない関数処理的な比較が，そのまま対照や同一を表わす節関係として実現されることもあり得ると考えられる訳である。

結局 Comparative Affirmation/Denial とは別に，関数処理的な認識活動として説明できる，より根本的な比較，つまり二節間に時間的流れを想定せず，比較対象に制限をもたない比較関係を，affirmation と denial という概念とは切り離して設定した方が良いと思われる。そこで，「比較関係（Matching Relation）とは，関数処理的な認識作用として説明できるものであり，系列的関係の言語単位を，その関係を規定している統合的関係の中に当てはめた場合に成立する文の真偽について比較するものである。比較する二つの言語単位の両方がその文を真とする時には，相似的比較関係（Symmetrical Comparison）が，一方がその文を真としもう一方が偽とする場合は，背反的比較関係（Contrastive Comparison）が成立する。そして，この比較が統合的関係として文章に顕在化する際には，比較の対象を表現する二つの命題の間に肯定・否定，特定など時間的序列を伴った関係が成立する場合も有れば，二

命題が双方向的に対照関係に結ばれる事も有る」と仮定する。

## 6. Comparative Denial 再定義

ここまでComparative Denialと呼んできた関係は，背反的比較の統合的顕在化の一形式であるという事になるが，具体的にはそれをどのように定義すれば良いであろうか。それは，上述の「世界の書き替え」と，比較対象の時間的序列という概念で規定できると考えられる。「$W_1$と$W_2$を，その中で命題pを主張した場合の真偽について比較すると，$W_1$でpは真であり，$W_2$でpは偽である」という背反的比較を「$W_1$では命題pが真であるが，$W_2$ではそうではない」というように，$W_1$に対する$W_2$という時間的序列の中で提示するものである。

Comparative Denialの定義に関しては，更に注意すべきことが有る。それは，「世界の書き替え」という概念をその基準にするのであれば，The princes were afraid of the enemy. Their followers weren't. というような二文間には，Comparative Denialを想定する事ができないという事である。Winterは，このような二文をComparative Denialの関係にあると見なしているが，そもそもDenialという場合には，同一の命題が繰り返されていないと不自然である。このthe princesとtheir followersの比較にみられるような関係は，本稿ではComparative Denialとは別の背反的比較の一形式と見なす。このような比較でも，世界の書き換えを含むComparative Denialでも関数処理的な過程として説明できる事に変わりはない。両者とも意味の特定を要求する点についても共通である。両者の違いは，後者では最初から完成した一つの命題が異なる世界で主張された場合の真偽を比較するのであるが，前者では既に前提とされている一つの世界で異なる命題の真偽を比較する点である。

Winterが，The princes were afraid of the enemy. Their followers weren't. というような二文間に，Comparative Denialを想定した理由の一

つは，the princes について真である事が，their followers については真ではない（What is true of X is not true of Y）と公式的に述べる事かできることであるが，その他の根拠として，二文間に Is this true of their followers? という疑問文を挿入する事が可能であり，第二文はこの疑問文に対する否定的な答えであると見なす事ができるという事も挙げられる。この様に挿入される疑問文は，Winter の文章分析に用いられる一つの手段であり，修辞的疑問文（Rhetorical Questions）と呼ばれるものである。それは，文章を書き手と読み手の間の相互作用と見なすと共に，二節間の意味関係を明らかにする為に用いられる。上記の Is this true of their followers? という疑問文は，それを挟んだ二節間に Winter のいう Comparative Affirmation か Comparative Denial が結ばれている証拠となる。

このことは，問題の二文を以下のような対話形式に書き換える事を意味する。

A：The princes were afraid of the enemy.

B：(Is this true of their followers?)

A：(No) Their followers weren't.

B に対する A の答えの前に補われる（No）は，上記二文の間の関係が Comparative Denial である事を示すというのが Winter の説くところである。しかし，ここで Winter が否定（denial）と考えているのは，B の疑問文に含まれていると考えられる命題 Their followers were afraid of the enemy. とその否定文 Their followers weren't. の関係なのであって，必ずしも元々の二文間の関係とは言えない。B：Is this true of their followers? という修辞疑問文は挿入時点で既に，the princes が敵を恐れたのだから their followers についても同様であろうといった予測に基づいている。この場合の否定（denial）とは結局，その予測の命題（p：Their followers were afraid of the enemy.）を現実の命題（not p：Their followers weren't.）が否定しているという意味なのである。又，その様な予測を前提としない場合には，二文間

には次のような疑問文の挿入も考えられる。

A：The princes were afraid of the enemy.

B：(How about their followers?)

A：(＊ No) Their followers weren't.

この場合は，(No) をBに対するAの答えとして入れる事はできず，否定(denial) という本来反対命題の間に成立する関係は結ばれない。元々の二文間には，本稿でいう背反的比較が有るだけである。従って，Winter が Comparative Denial と見なしている The princes were afraid of their enemy. Their followers weren't. のような二文は，実は最初の文に基づく予測の命題 p と現実の not p の関係であると考えれば，Comparative Denial が「世界の書き換え」を前提とするという本稿での定義にも矛盾しない。つまり，この場合には，予測という世界が現実という世界に書き換えられたと考えられるからである。

## 7. 節関係のネットワーク

Corrective Replacement について，実はそれは最初の陳述の節，否定の節，訂正の節という三つの文の関係を捉えたものであることには既に触れたが，もし訂正 (correction) という概念を最後の二節だけの関係と考えてしまうと，次のような文章の説明には不自然な感じがする。

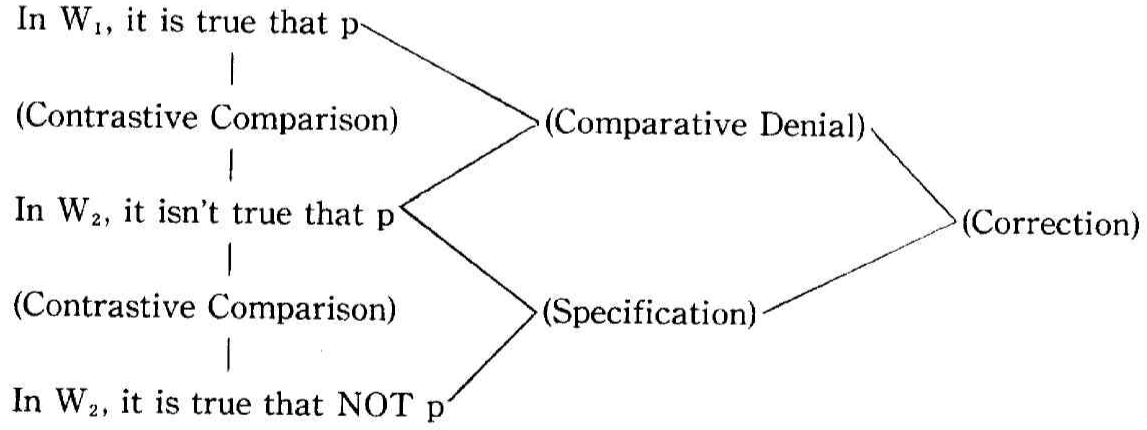
We insist that the Government's priority should be to expand higher education further. However, it is not what the Minister of Education suggests in his paper. He suggests that the Government's priority is to make higher education even more the preserve of the rich and privileged than it is now.

この文章の最後の二文間には，to expand higher education further の to make higher education even more the preserve of the rich and privileged

than it is now による情報の入れ替えがある。しかし，これを訂正的入れ替え（Corrective Replacement）と考えるのは，第一文で示されている書き手の主張とは背反的である命題を正しいものとするかのようで，少なくとも不自然である。つまり，訂正（correction）という概念は必ず誤り（mistake）という概念を前提としており，誤った情報を入れ替えるのでなければ，訂正的入れ替えという言い方は奇妙な事になる。ところが，この例で入れ替えられる情報は，誤った情報とは理解し難いのである。

訂正的入れ替えという言い方が適切であるためには，第一文で提示された情報が第二文で否定され，既に誤りと判定されている必要が有る。この先行する二文との関係で，最後の文での入れ替えが訂正と理解できる。従って，訂正という概念は最後の二文間の関係としてではなく，三文全体の関係として理解されるべきものである。

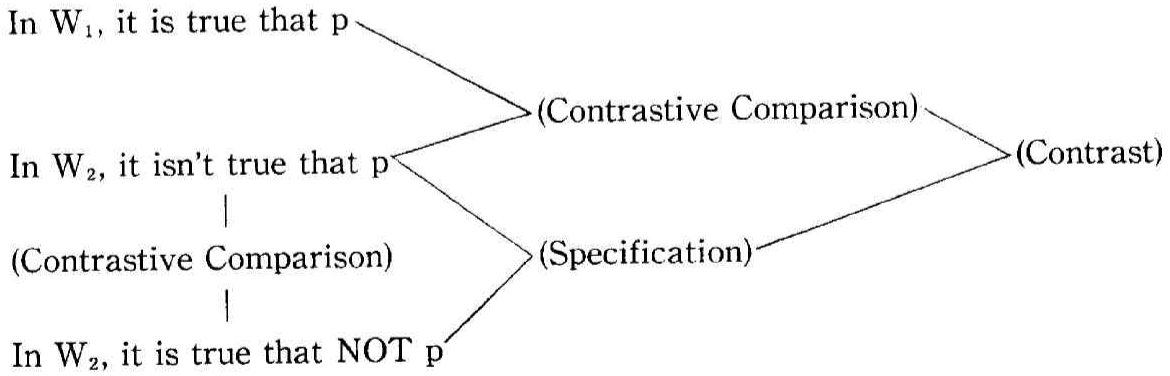
三文間の関係を Correction（又は Mistake-Correction）と捉えるとすると，それは既に二文間に成立している Comparative Denial や Specification（特定）という節関係と階層を成し，次のように図示できる。




この図は，最初の二節と最後の二節の両方に，対象の間に時間的序列を前提としない背反的比較を想定する事ができるが，それぞれの比較は Comparative Denial, Specification という新たな節関係をも構築している事を示している。そして，更に Comparative Denial と Specification は，Correction という上層の節関係を結んでいることを示している。

ネットワークの頂点に結ばれる意味関係は，Correction だけではない。例えば，前掲の書き手の主張が否定されるような文章では，ネットワーク頂点の節関係はむしろ挫折（Frustration）といった方が良い。頂点の意味関係が訂正となるか挫折となるかは，Comparative Denial に譲歩（Concession）の意味が含まれるか否かにかかっている。つまり，第二文の否定の意味が「しかし $W_2$ではそうではない」という意味であるか，譲歩の意味を含む「にもかかわらず $W_2$ではそうではない」という意味であるかによって，前者の場合は訂正が，後者の場合は挫折がネットワークの頂点の節関係として結ばれる。

又，Comparative Denial とは，世界の書き換えを前提とする上に，否定（denial）という意味的特徴から，$W_1$に対する $W_2$という世界の時間的序列を含む事を述べたが，そのような序列はつけない比較関係が二節間で実現される事も考えられた。その場合は $W_1$と $W_2$は双方向的関係で結ばれて，第一文と第二文の間には世界の書き換えを含みはするが，その間には時間的序列をつけない単なる背反的比較が成立することになる。この時の第二文は，「一方 $W_2$では，そうではない」という意味になる。この場合は，節関係のネットワークの頂点には，対比（Contrast）という節関係が結ばれると考える。この場合の節関係のネットワークは以下に示すようである。




尚，The princes were afraid of the enemy. Their followers weren't. They were fearless of them. というような文章も，世界の書き換えを含まないという点を除けば，同様の節関係のネットワークとして説明できる。

三文間に結ばれる節関係のネットワークの頂点には色々な節関係が成立す

る可能性が有るが，「節関係のネットワークの頂点」といっても，勿論ここで問題にしている三文で文章が完結するという意味ではない。節関係（Clause Relation）とは，二つの節間（二組の節間）にある二元的な意味関係であり，例えばある節が訂正（correction）と判断されれば，必ず誤り（mistake）の役割を果たす節が必要となるし，挫折（frustration）と判断される節があれば予測（expectation）という働きの節が存在する事になる。上記のCorrection，Frustrationという意味関係は，二元的に表せばMistake-Correction，Expectation-Frustrationというように表す事もできるものである。それぞれの1番目の要素はComparative Denial，2番目の要素はSpecificationに対応する。そして，この様な二元的意味関係は，更に上の階層に位置する二元的意味関係の一要素としての役割を果たす事により，より大きな文脈の中に位置付けられていくのである。例えば，挫折(Expectation-Frustration）の節関係がここで示したネットワークの頂点に成立する場合，それは更に高次元の問題―解決（Problem-Solution）という節関係の，問題（Problem）部分の働きを果たし，解決（Solution）部分の実現を強く要求することになる。

## 8. テキスト分析

It was officially reported that the convict escaped from the prison. In fact, he didn't. On the contrary, he killed himself in a cell. という文章は，the convict escaped from the prison と he killed himself in a cell という二つの命題を系列的な関係として認識させ，それぞれをpとNOT pと表す事ができるような反対対当の関係で結んでいる。ここまでに，文を世界特定要素・主張要素・命題要素という構造で捉えたこと，世界の書き換えという概念を提示したこと，Comparative Denial，特定(Specification)，訂正(Correction)などの意味関係を定義したことは全て，この系列的関係にあると理解さ

れる命題が，前記の文章として実現する過程を，一定の規則性をもつものとして説明する為と言って良い。ここで仮定した概念が同様に特定できるような文章は，構造的繋がりをもつ文章と見なすことができる。また，ここで示した構造は，その変形と見なし得る文章構造が見つかるならば，その変形はいかなる理由によるものであるかを考えるための，取りあえずの基準となると思われる。

前掲の例文の中で，接続副詞 on the contrary は，特定（Specification）が命題 p に対する反対対当の情報 NOT p の提示によってなされている事を明示していると考えられる。それが省略された場合には，特定の種類がそれほどには明確でなくなるものの，今まで示してきた構造で説明される文章であることに変わりはない。節関係を明示することがその主な役割であるこの接続副詞は，文章中に含まれれば必ず反対対当の関係の命題も含まれている事を暗示する。特定は反対対当の提示によってだけなされるものではないし，この接続副詞を含む事が決してないような，系列的関係にある命題の実現形式も有り得る。

しかし，この接続副詞が含まれている文章を，ここまでに述べてきた節関係に照らして検討する事は，その妥当性と問題点を考える上での第一歩となり得るはずである。その目的で，英字新聞 Independent & Independent on Sundays on CD-ROM をデータとして，1988年10月 1 日～1989年 3 月31日までの間の on the contrary を含む記事を分析してみた。この間の on the contrary を含む記事は84個見つかった。それを，系列的関係の反対対当の命題が，どのように文章内で提示されているかについて分析した。分析データは量的に多いものではないので，統計的な事は言えないが，以下に示す 4 形式が頻出するものであることが解った。それ以外にも，それぞれの形式の派生的なものと見なし得るものや，別形式と考える方が適切なものもあるが，ここでは触れない。

**第1形式**（15例）

以下に示すのは，In $W_1$ it is true that p. In $W_2$ it isn't true that p. In $W_2$ it is true that NOT p という本稿で示した構造の全ての要素を含んでいると考えられるものである。ここまでに議論してきた事と直接関連し，他の形式を位置づける基準ともなる形式である。以下に3例のみ示す。(猶，テキストの各文には便宜上番号をつけた。)

● **Text 1**

(1) Charges that Britain vetoed Lord Cockfield's plans to counter EC fraud during his period as a British Commissioner at Brussels were rejected yesterday by Lynda Chalker, Minister of State at the Foreign Office.

(2) Lord Cockfield alleged last week that British ministers blocked his scheme three years ago, and Lord Young, the Trade and Industry Secretary, promised to look into his complaint. (3) But Mrs Chalker insisted during a Commons debate on developments in the European Community that the charge was groundless. (4) On the contrary, the UK has been a leading advocate of the anti-fraud unit, which has been set up by the commission.

(2)の，Lord Cockfield alleged last week は，(In $W_1$ it is true) という世界特定要素と主張要素を表し，British ministers blocked his scheme three years ago は命題 p に当たる。(3)の But Mrs Chalker insisted during a Commons debate on developments in the European Community は，(In $W_2$ it is true) を表し，the charge was groundless は命題 not p に相当する。又，the charge は命題 p に言及するための表現である。文頭の接続詞 But は，ここでの比較が「$W_1$では p だ。しかしそれに対して，$W_2$では not p だ。」というように世界 $W_1$と $W_2$の間に時間的な序列がある Comparative Denial の関係が成立している事を明示している。(4)により，not p は特定されるが，

On the contrary 以下が p とは反対対当の NOT p : the UK has been a leading advocate of the anti-fraud unit, which has been set up by the commission を提示する。(2)-(4)全体で訂正 (Mistake-Correction) の節関係を築いている。

● Text 2

(1) The role of the Security Council's permanent members should be that of creating a constructive atmosphere for discussing every problem. (2) In many of the analyses of Mr Shevardnaze's tour by the Western press, the USSR has been accused of trying to limit the United States 's sphere of influence in the region (the Middle East), and even of trying to oust it altogether.

(3) Such arguments are reminiscent of the cold war era and have nothing to do with present realities. (4) On the contrary, improved Soviet-American relations and mutual understanding have created a favourable background for progress in the Middle East settlement.

以下，簡略化して構造を表す。

In many of the analyses of Mr Shevardnaze's tour by the Western press …has been accused of (In $W_1$ it is true に当たる。In the accusation made in many of the analyses of Mr S.'s tour by the Western press, it is true と書き換え得る)

the USSR…trying to limit the United States's sphere of influence in the region, and…trying to oust it altogether. (命題 p)

Such arguments…have nothing to do with present realities. (In $W_2$ it isn't true that p に当たる。Such arguments は命題 p に言及する為の語句。)

(4)= (In $W_2$ it is true that NOT p)

(3)の文頭には But を挿入する事が可能であり，Comparative Denial が成立していると考えられる。(2)-(4)全体としての節関係は，Mistake-Correction

である。

● Text 3

(1) With the mild weather in Britain this winter, it feels as though spring is well on its way, and Easter seems almost overdue. (2) In fact, this year Easter is not late; on the contrary, a 26 March slot is unusually early. (3) We must go back to 1951 to find an Easter that fell earlier (25 March).

seems (In $W_1$, it is true)

Easter…almost overdue (p)

In fact, this year (In $W_2$)

Easter is not late (it is not true p)

a 26 March slot is unusually early (In $W_2$ it is true that NOT p)

(2)の In fact は，But の意味を暗示し，Comparative Denial が成立している。

(1)-(2)の節関係は Mistake-Correction。

**第 2 形式**（9 例）

次に示すテキストは，In $W_1$ it is true that p. を，In $W_2$ it isn't true that p. に構造的に従属させているものである。第 1 形式のテキストでは，In $W_1$ it is true that p. が独立した文で表現され，新情報として提示されていた。それに対しここで示すテキストは，In $W_1$ it is true that p. を In $W_2$ it isn't true that p. が主節として表されている文の一部として組み込み，旧情報として示している。そのため，第 1 形式のテキストでは，一度は $W_1$に視点を置き，それが $W_2$に移動するという流れであったのに対し，ここで示すテキストは，最初から $W_2$の視点から $W_1$を回顧するような感じになる。このタイプには下に示す 2 種類がある。

● **Text 4**

Dear Sir,

(1) Eric Heffer is wrong in claiming that the National Dock Labour Scheme has given dockers security of employment (Letter, 5 December). (2) On the contrary, the scheme has caused the loss of thousands of jobs.

(1)は，第1形式の表現形式に従えば，Eric Heffer claims that the National Dock Labour Scheme has given dockers security of employment. He is wrong. (It isn't true.) と表現されるところである。しかし，2番目の文に1番目の文を従属させることにより，$W_2$の視点から$W_1$について述べている。文中の(Letter, 5 December)が明示しているように，以前に述べられたEric Hefferの意見は旧情報として扱われている。(1)には，Comparative Denialと判断できる比較関係がある。文章全体としてはMistake-Correctionの節関係が成立している。このテキストでは，$W_1$の中で命題pが主張されているのであるが，次のテキストでは世界特定要素$W_1$だけが示され，その中で主張される命題pは示されず，$W_2$で示される命題not pから算定する事になる。

● **Text 5**

Dear Sir,

(1) I advise your readers to take Victoria Neumark's comments about the Natural History Museum (5 January) with a large pinch of salt. (2) Contrary to the gloomy picture she paints, our museum is thriving. (3) Its education services have not been closed down as she seems to think. (4) On the contrary they are expanding.

この文章のVictoria Neumark's comments about the Natural History Museum, the gloomy picture she paints, as she seems to thinkは全て$W_1$を示す世界特定要素と見なす事ができるが，その世界の中で直接pが主張されているものはない。(3)の，Its education services have not been closed

down は，In $W_{2(my\ knowledge)}$, it is not true p. を提示しているが，そこから逆算して as she seems to think（$W_1$）で主張されている命題 p：Its education services have been closed down. を得るのである。世界特定要素 $W_1$ を提示するのみで，その中で主張する命題を明示していない分，Text 4 で示した種類よりも $W_1$ の影は薄くなるといえる。

尚，これら 2 種類の，$W_1$ を $W_2$ に従属させる形式と判断されたテキストは 9 例あったが，その中の 5 例は，読者が編集者に当てて意見を述べる Letters page に掲載された記事であった。この事実は，以前に新聞に掲載された記事に対しての読者の意見が述べられるという Letters page の特性を反映しているともいえる。つまり，掲載済みで既知と判断された情報が，$W_1$ の $W_2$ への従属という文構造で表現されているのである。

**第 3 形式**（35例）

次に示すのは，文章中には In $W_2$, it isn't true that p. In $W_2$, it is true that NOT p. だけが現れ，In $W_1$, it is true that p. が見かけ上欠落している形式である。見かけ上というのは，様々な方法でその存在が暗示されたり，それが明示されていないという事が積極的な意味を持つ場合がほとんどだからである。明示される In $W_2$, it isn't true that p から，p は機械的に得る事ができる訳だが，それが主張される筈の世界要素 $W_1$ は明示されない。この形式には，主に二つの種類がある。一つは，世界要素 $W_1$ は明示されないが，命題 p が主張されていたかのように，$W_2$ で否定するというものである。この場合は，色々な方法で p の主張される $W_1$ の存在が暗示される。もう一つは，そのような方法で p を主張する世界の暗示が行われない場合であり，文脈からも p の主張される世界がはっきりとは推察できないような場合である。

● **Text 6**

(1) So far two politicians—the Finance Minister, Kiichi Miyazawa, and a lesser-known Socialist member—have resigned after being implicated

in the Recruit affair. (2) Mr Watanabe explained that he has no intention of stepping down. (3) On the contrary, he argued that given the present role of politicians as dispensers of funds to voters, they simply cannot refuse funds that come their way.

(2)から逆算して，p：Mr Watanabe steps down. が得られるが，この命題は(1)に示された二人の政治家の先例から予測されているものである。その事は，(1)と(2)の間に Is Mr Watanabe also resigning? という修辞的疑問文を挿入する事ができることでも伺える。この修辞疑問文に含まれる命題 p が暗示されているわけである。命題 p が主張される世界の明示はないが，それが民意においてであるとか，モラルにおいてであるとか，世界の特定をしないでもすむ事が，この形式の特徴である。

● Text 7

(1) ATHENS—Greece on Wednesday expressed concern over the incident (the air battle) and said such incidents could cause dangerous chain reactions in the Mediterranean, AP reports.

(2)"Such incidents do not reduce tension between the two countries, but on the contrary create conditions of further escalating it with unforeseen consequences," a government spokesman said.

(2)より逆算して命題 p：Such incidents reduce tension between two countries. が得られる。しかし，先行文脈(1)において既に命題 not p を暗示する情報があり，命題 p を主張する世界 $W_1$ を予測させる要素はない。先行文脈により $W_1$ が暗示される上掲の場合に比して，より $W_1$ の影は薄くなる。

**第 4 形式**（16例）

以下に示すのは，In $W_1$, it is true that p. In $W_2$, it is true NOT p. と表す事のできる形式で，In $W_2$, it isn't true that p. が欠落しているものである。In $W_2$, it isn't true that p. は，一般的には Comparative Denial に含ま

れている否定という関係のため，$W_1$に対する$W_2$という時間的序列を世界間につける事を述べたが，ここに示す形式では，その Comparative Denial が欠落している。否定を表す節を明示しないという事は，世界間に時間的序列をつけずに比較する背反的比較（Contrastive Comparison）が作用している事を示す積極的な表現手段であると考える。その比較は双方向的なものであり，それぞれの世界は基本的に対等な関係にある。全体としては，対照（Contrast）の節関係を成立させる。そのため，訂正（Correction）を文章全体の節関係とするような場合には，仮定的世界（hypothetical world）と現実世界（real world）の対立と見られるような比較が多いのに対して，この形式では二つの仮定的世界が対等に対立しているとみられるような場合が多い。又，最上層の意味関係として訂正が成立する場合は，否定を表す仲介的な節を，Is it also true in $W_2$？という修辞疑問文に対する答えと見なす事ができるが，この形式の二節間の意味関係は，How about in $W_2$？という修辞疑問文で示される。つまり，$W_1$に基づき$W_2$でも同じ命題 p が真であろうという予測とその否定を必ずしも前提としていない。

● **Passage 8**

(1) Of the greater part of his writing I am incapable of assessing its worth. (2) I think he wrote far too many books too effortlessly. (3) On the contrary, he once assured me that he found writing a great effort. (4) *The Homing of the Winds, The Hunters and the Hunted, Monks Nuns and Monasteries* and dozens more were about everything and nothing.

比較されている世界は，I think（$W_1$）と he once assured me（$W_2$）と表されている。しかし，$W_1$と$W_2$の間に時間的序列はなく，反対対当の関係の命題 p：he wrote his books effortlessly. と命題 NOT p：he wrote his books with a great effort. の関係は対等である。$W_1$で主張された命題 p の否定(not p)が明示されてはいないからである。そこで，(1)の I am incapable

of assessing its worth という結論は，この文章の書き手の判断と作家の判断が矛盾していることを理由に下されたと理解できるし，(4)の about every-thing and nothing という矛盾した表現も意味を持つ事になる。

ただこの形式は，反対対当の意味の情報を提示するということに加え，前の節の情報を否定する働きを持つ接続副詞として，on the contrary が用いられている場合とは区別する必要が有る。それは，特にインタヴューなど会話形式で書かれた記事で，相手の発話を否定する時に多く見られるものである。

● **Passage 9**

Victor : Well, quite honestly, I don't expect the position to change.

Dmitri : Why not ?

Victor : At the end of the night, it will still be Communists 2,300, others nil.

Dmitri : Why ?

Viktor : Because only Communist candidates are standing.

Dmitri : So it is all a waste of time ?

Victor : On the contrary. To have many candidates standing, all from the same party, is true freedom.

又，会話体の文章ではなくても，以下のように on the contrary が，明らかに否定の意味をもつものも多く見られる。

● **Passage 10**

Many people think the cameraman shoots the film and it goes into the 'can', then the editor cuts it about and it comes out finished. On the contrary, the film quite often has to be re-placed : The dialogue of an actor (maybe a 757 flew over the set during a romantic love scene) sometimes has to be replaced. . . .

## 9. 結　　論

本稿では，文章の中で元来系列的関係にあると考えられる命題が，新たなる統合的関係として文章に顕在化する過程を説明するために，以下に述べるモデルを提示する。

ここで扱った系列的関係の命題とは，特に反対対当の関係にある命題である。そもそもいかなる二つの言語単位であっても，それが系列的関係におかれる場合，その目的は比較の為である。その比較は，究極的には関数処理的な認識作用として説明できる。それは，その二つの言語単位を系列的関係と規定している文の枠にそれぞれ当てはめた時に完成する文の真偽を比較するものである。その文の枠は，文章中の節間における情報の繰り返し (Repetition) となって現れる。そして，その比較の結果両方とも真理値が同じ場合は相似的比較 (Symmetrical Comparison) が成立しており，真理値が異なる場合は背反的比較 (Contrastive Comparison) が成立していると定義する。

本稿で議論した比較の一つは，背反的比較の中で，特に「世界の書き換え」という概念として説明できるものであり，二つの世界 $W_1$ と $W_2$ をそこで主張される命題 p の真偽について比較し，その比較の結果が異なるものである。その比較は以下のように図示できる。

$$\begin{array}{lcl} \text{In } W_1 & & T \quad ① \\ \quad | & p & \\ \text{In } W_2 & & F \quad ② \end{array}$$

この背反的比較のうち，特に世界間に時間的序列をつけるものを Winter の用語を援用して Comparative Denial と呼んだが，時間的序列の如何に関わらず，②は情報価値の点から特定 (Specification) を要求する。それは結果的に以下に示すもう一つの背反的比較を成立させる。

| | | | |
|---|---|---|---|
| | p | F | ②′ |
| In $W_2$ | \| | | |
| | NOT p | T | ③ |

本稿で議論してきた系列的関係にある二つの対立的命題とは上記pとNOT pの関係といって良い。そして，②と②′を接点とする一連の背反的比較は，様々な実現形態で文章に顕在化するのである。

まず①②③全てを顕在化させたと考えられるのが，テキスト分析に示した第1形式（Text 1-3）の文章である。本稿を通じて用いた以下の例文もこの形式である。

It was officially reported that the convict escaped from the prison. In fact, he didn't. On the contrary, he killed himself in a cell.

第2形式（Text 4, 5）は①を②に従属させる表現として実現する。その一つの実現パターンは$W_1$の中で主張するpを明記するものである（Text 4）。（以下，それぞれの形式の文脈的特徴を対照的に示す為に，同一の反対対当の命題を用いて例を示す。）

The police made a false report that the convict escaped from the prison. On the contrary, he killed himself in a cell.

もう一つは，世界特定要素$W_1$のみを示し，その中で主張されるpは明示されず，not pから逆算されるものである。（Text 5）

The convict didn't escape from the prison as was officially reported. On the contrary, he killed himself in a cell.

第3形式（Text 6, 7）は，①が欠落し，②③だけが顕在化したものである。欠落の一つの理由は，文脈，but等の接続詞の使用や，その他様々な方法でpの不特定な世界での主張を暗示するためである。（Text 6）

Hundreds of policemen were in search of the convict. But we found out that he didn't escape from the prison. On the contrary, he killed himself in a cell.

もう一つの①の欠落は，先行文脈から not p または NOT p が予測される場合であり，上掲の例以上に p の主張される $W_1$ の影は薄い。(Text 7)

The prison was on a small island in the open sea. So, the convict didn't escape from the prison. On the contrary, he killed himself in a cell.

第4形式は，①③だけが顕在化したものと考えられる。(Text 8-10)

It was officially reported that the convict escaped from the prison. On the contrary, one of the inmates said that he killed himself in a cell.

これらの実現形式が持つ意味的特徴は，第1形式のテキストを基準にして，それとの比較によって説明された。以上，本稿で提示されたモデルは，上記①②②′③の比較構造が様々な実現形態を持ち，それぞれの形態が独自の文脈的特性を持っている事に，整合性のある説明を加えることができるものと考える。

---

**注**

1) 二文以上の関係を意味のまとまりのあるテキストにする結束性 (cohesion) については，Halliday-Hassan (1976) 参照。

2) Winter の用語は，日本語に定着した訳語が見当たらず，Clause Relation, Matching Relation, Logical Sequence Relation, Comparative Affirmation, Comparative Denial など，本稿に用いられる用語はそれぞれ Winter 独自の概念を表すものなので，ここではそのまま英語で用いる事にする。

3) ここでの Comparative Denial という節関係は，in contrast という接続副詞によって明示されている。Winter は，Clause Relation を明示する言語手段を，それが用いられる文法的環境により，3種類に分けている (Three types of Vocabulary )。例えば，in contrast, on the other hand, in spite of this などは，Comparative Denial を明示するもので，Vocabulary 2 と呼ばれるグループに入る。Vocabulary 2 は，二つの独立節の関係を明示するのに用いられ

る。同様の節関係は，The princes were afraid of the enemy, *whereas* their followers weren't. という様に，Vocabulary 1で表現したり，The princes were afraid of their enemy. Their followers were *different.* と Vocabulary 3で表現したりできる。

又，二つの節関係が明示されていない場合は，これらの Vocabulary を文に挿入して確認することができるだけでなく，それぞれの節関係を判断する為の Rhetorical Questions と呼ばれる疑問文を挿入して確認する事ができる。例えば，Vocabulary 3の一つである true という単語を含む次の疑問文は，Comparative Affirmation の確認の為に使われる。The princes were afraid of the enemy. *Is this also true of their followers ? (No)* Their followers weren't. 最後の文は疑問文に対する否定的な答えと見なされ，疑問文を挿入する前の二文の間には Comparative Denial が成立していると判断される。

4) afraid と矛盾対当の関係の not afraid を反対対当の関係の fearless で特定する事は，いわゆる否定辞搬送（negative-transportation）の現象が見られる文の意味理解の場合と同様に，自然言語では矛盾対当の関係が反対対当の関係に強められる傾向がある事と関係している。この件に関しては，Horn（1989：308-330）参照。

5) 命題の相対化については，Ohashi（1997）参照。

**参考文献**

Allwood, J., Anderson L. G. and Osten, D. (1977) *Logic in Linguistics.* Cambridge : Cambridge University Press.

Halliday, M. A. K. and Hassan, R. (1987) *Cohesion in English.* London : Longman.

Horn, L. R. (1989) *A Natural History of Negation.* Chicago : The University of Chicago Press.

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. N., and Svartvik, J. (1972) *A Grammar of Contemporary English.*

Ohashi, S. (1997) "Propositional Relativization in Written Texts." *Kanagawa University Studies in Language* 20. Kanagawa University Institute of Language Studies.

Winter, E. Q. (1974) "Replacement as a function of repetition: a study of some

of its principal features in the clause relations of contemporary English." Unpublished Ph. D. dissertation. University of London.

Winter, E. Q. (1977) "A clause relational approach to English texts : a study of some predictive lexical items in written discourse." *Instructional Science* 6. 1.

Winter, E. Q. (1982) *Towards a Contextual grammar of English : the Clause and its Place in the Definition of Sentence.* London : George Allen & Unwin.

太田朗（1980）『否定の意味』大修館書店

坂原茂（1985）『日常言語の推論』東京大学出版会

佐伯胖編（1982）『推論と理解』東京大学出版会

毛利可信（1980）『英語の語用論』大修館書店